日本ハンザキ研究所ニュース 2010(4)：通巻 No. 52
発行２０１０年４月３０日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO 法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

ハンザキの民俗資料④

カエル？ハンザキですね！！

焼き物のハンザキは沢山ありますが、これはユニークな作品です。一見してカエルかと思わせられますが、細長い体のハンザキもほぼ正面から撮影するとこんな感じになりますので、製作者も多分そのイメージを表現したのでしょう。同じ両生類でもあり見る角度によって似てくるのでしょう。入手先は滋賀県立琵琶湖博物館のミュージアム・ショップです。10 年まえに姫路市立水族館の飼育係がお土産に買ってきてくれたものですが、その後何回か見学に行ったものの品切れになったままのようでした。

工房は熊本県人吉市の古仏頂焼“いしの窯”です。高場英二さんは「土」を拝み、「火」に祈り、「川」に遊び、「山」になごむとし、窯に火を入れては御神酒をあげ、よく焼けたといっては祝杯をあげる、人の心がほどけていくような「やきもの」を創りたい・・・・
そんなことを思いながらまた一盃・・・感謝・・・としています。

ユーモラスなハンザキの焼き物

川に遊び、山になごむ、そして一盃、まさに私の現状を言い当てられている気がします。たしかに、この作品を眺めるとほのぼのとした雰囲気がかもし出されているように見えます。しかし、ハンザキが生息していないことになっている（発見例はあるが）熊本県の球磨川の源流域で、どのような創作イメージを持たれたのでしょうか？　最近はグロテスクの代表かと思われていたハンザキも“なごみ”の対象になってきています。夜の川底でヒッソリとヒトよりも長い歴史を刻んでいるハンザキをもう一度見つめなおしてください。

写真１　破損した水源のパイプ

写真１　駐車場の整備

写真３　ネットに体当たりして脱走するアオサギ

写真４　プールサイドに侵入したアオサギ

写真５　一万人目のセレモニー

写真６　購入したユンボで植樹を

一万人目の来訪者を迎えて

有料公開施設ではありませんので、何人の方が来られても儲かるわけではありませんし、ただひたすらに忙しくなるだけです。しかし、平成 17 年８月に開所して今月で約５年となり、月末かゴールデンウィークで確実に一万人に達すると考えられましたので、４月 29 日を設定してセレモニーの用意をしました。初年度の 46 人から年々1,000 人増加と言うペースで来訪者が増えてきました。昨年は 3,310 人と言う数で、黒川地域の人口の 40 倍を超える数です。

この数字は見学者だけではありませんが、とにかく十数年間も無人の施設に５年ですが平均して年に 2,000 人の出入りが在ったということは高い評価をしてもいいのではないかと思います。無論、来訪者には周辺の情報もできるだけ発信するように心がけています。食事時間なら“アマゴ丼”にするか“鹿カツ”又は“アマゴうどん”、食欲旺盛な若い人たちには大盛りの“せせらぎ丼”を勧め、季節ごとの食べ物を賞味したい方には“わしが大将”の広報をしています。

見学者はやはり生き物に関心が強い人が多いので構内の“ハンザキ・グッズ”の受託販売コーナーに案内し、更に本店？の銀谷工房や温泉のショップの地図を渡しています。そのほか、生野町内のことなら何でも答えることができるように情報を集めています。莫大な広告費を使っての宣伝などできませんが、口コミで少しでも町の活性化に繋がっていけばいいなと考えているところです。

さて、29 日に設定したものの、祝日とはいえ果たして見学者があるかどうかが気に掛かります。横の国道を走る車は多いのですが人が来ません。黒川本村の様子を聞くと「ドクターヘリ」のデモンストレーションが行われるとかで人が動いていないそうです。仕方ないので事務局長さんに出向いてもらい、適当な家族などがいれば来訪してもらうことにしました。しかし、なかなかやってきません。そこへ格好のファミリーが入ってきたのです。おじいちゃんおばあちゃんと 3 人の子供連れの一家でした。明石市の楢原さんは生野町内にこのほど発足した日下リンゴ園の“リンゴの木オーナー制度”に当選してその世話をしたついでに２回目の来訪だそうです。

記念品の“ハンザキ抱き枕”や黒川こしひかりなどを受け取ったご一家は大満足で帰っていかれました。マスコミの皆さんも良い写真が撮れたと大喜びをして大きな記事にしていただきました。無料公開施設が宣伝しても儲からないのではないかとも言われます。しかし、ハンザキの保護、生息環境の保全には多くの方々に知っていただき、理解してもらうことが第一歩だと思います。見たことも無い、そして夜の川の中でひっそりと暮らしているハンザキでは、知名度が高いわりには保護への意識が低いのもやむをえません。ですから、私はできるだけ多くの方にハンザキのことやハンザキ研の存在と活動を知ってもらえる機会を増やすことを考えているのです。ささやかな活動ですが、種はまかねば木は育ちません。皆さんも是非見学に来てみてください。

過疎地域の水源

ハンザキ研のある旧・生野町立黒川小中学校には水道が無い。学校ができる前には川上と川下の集落の距離は５㌔も離れています。学校は６集落の中間に建てられているが、これは通学の公平さだけでなく水源があるかどうかも重要な条件であったと考えられる。川からポンプを使って汲み上げれば簡単だろうが電気代がかかって大変だ。当地区のほとんどの家庭も山水を利用しているが、年間を通じて水が涸れない水源を確保するのは大変である。ハンザキ研の主水源は南側の谷あいからの細い流れである。山が浅いので雨が無いと涸れてしまう。そのために川を越えて猪ノ子谷からの取水が学校の主水源になっていたようである。子供たちがいなくなった校舎には水が不要なのでホースは切れたままになっている。ここで生活するためにはこれを予備水源として復活させることが必要で、細いホースをつないでもらった。

通常は予備水源が要らないので、校庭の池に給水することにしたが、一気にモリアオガエルの大産卵場に変わった。水の涸れていた池に通水すると毎年のように 50 卵塊ほどの白い塊が見られるようになったのだ。ところが５月からの産卵シーズンを前にして池の水が無くなっていくのです。給水量が極端に減少して池の漏水を補えなくなったためです。山に登って集水槽の点検に行きました。谷川をせき止めてエンビのパイプが集水槽に繋がっているのですが、そのパイプに見事に大木が倒れて破壊していました。そばにブリキの看板が落ちていたので樋を作って応急処置をしておきました。後は継ぎ手を入手して配管の修理が必要ですが、まだできていません。順調に池に水が供給されているので後回しにしているのですが、いつまた突然に断水になるかもしれません。

いつもヒダサンショウウオを見つけてくれる方の水源も見せていただきましたが、山中の細い流れを石で堰きとめて、プラスチックの桶につないで受水層としていました。たびたび断水するので山に登っては堰やタンクの掃除をして復旧するのだそうです。高齢の方なので大変な作業ですが命の水ですから、先祖代々大切に使って来られたようです。

当研究所の上水道にはフィルターがありません。ですから大雨があって谷すじを一気に水が流れると泥水になってしまいます。あるとき、風呂に湯を溜めていて泥湯温泉になっていて驚いたことがありましたが、美人になったことでしょう。給水の途中で塩素滅菌していますが、この管理もうっかり忘れることがあって気が付いたら次亜塩素酸タンクが空になっていたりします。しかし、山の水なので水道メーターが付いていませんので洗濯機が流しっぱなしになっていても大丈夫です。といっても、あんまり垂れ流すと細い谷水ですから断水しかねません。そのための副水源が猪ノ子谷からの配管でサイフォン・ホースで池に入ると同時に上水の貯水槽が減水するとボール・タップの働きで自動的に補水できるするようになっています。水が十分に使えるのは有難いことですし、池にはツチガエルやモリアオガエル、トノサマガエル、イモリが産卵しカワニナも大量に繁殖しています。水に感謝、水があれば生き物が住み着くということですね。

アオサギとの戦い・知恵比べ

今の日本では大型の鳥類になるだろうアオサギは嫌われ者だ。なぜならば、アマゴやニジマスなどの養殖場に飛来しては大量の魚を捕食する。ある養魚場の主は一体どのくらいのアマゴを食うのか観察したと言う。結果は 70 匹だったという。100㌘のアマゴとしても 7㌔という餌が胃袋に入ってはたやすく飛ぶことができないのではないかといらぬ心配をしてしまう。

我がハンザキ保護センターのハンザキの餌であるアマゴやニジマスも彼らの目標にされている。朝早く見回りに行くといち早く危険人物を見つけて飛び去っていく。背中にアオサギのくちばしによる傷が付けられたアマゴが泳いでいる。対策としてワイヤーを張り巡らした。羽が当たると鳥は嫌がって寄り付かないと言われている。しかし、一度味を占めたアオサギは少々のことでは引き下がらない。ワイヤーに何回も体当たりしては脱出していく。野生の生き物にとっては餌こそが最大の魅力であり生き延びるための対象なのだろう。

ワイヤーだけでは対抗できないので網をかぶせることにした。それでも侵入できるところがあったのだろう、また入っていたが入り口と出口は同じではない。何度もワイヤーとネットに体当たりしていたが逃げていった。後には大量のアマゴの吐出しが残されていた。折角胃袋に収めた餌であっても、命には代えられないのだ。ネットに足や羽をからませて血を出しながら必死になってあがき脱出を試みている。これだけの危険を体験しながらも再び侵入してくる。生き延びるための必死な努力であろうが、みすみす餌を平らげられるのは癪に障ることなので知恵比べ根競べの日々をすごしつつ、ようやく諦めていただけたようだ。あの鋭いくちばしと私より早く危険人物を見つけて飛び去っていくアオサギにはコウノトリのようなサンクチュアリーはありえないのだろう。

・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

本日は 7 月の 1 日です。前回にも言い訳をいたしましたが、またまた 3 か月の遅延となりました。やっと 4 月号を校了したところなのですが、どうも脳みその方がストライキをおこしているようです。そもそも一人でのニュースレターの発行は無理があるのだと思います。NPO のスタッフからもまだかまだかと催促されるのですが、気が向かないというか、いよいよまでの切羽詰った状況に追い込まれないと拍車がかからないのかもしれません。昨日今日の出来事では、あれもこれも皆様方に教えてあげたい、知らせてあげたいと思いつつも時間が過ぎていくに連れてその思いが薄れていってしまうようで申し訳ないことです。やはり一人だけでと言うやり方は限界があって、できるだけ多くの方々の参加を得て進めていかねばならないのだと思います。皆様方からの原稿をお願いしたいのですが・・・

ハンザキ研日誌　　２０１０年４月

１日　日下リンゴ園のリンゴの木のオーナーになる
２日　・精密ノギス２本 8.2 万円で購入
　　・猪子谷川からの給水が切れる。
４日　歯痛で下山、GS-300 終了（３月 30 日～）
６日　・GS-301 開始（～５月 9 日）
　　・猪子谷の水源パイプが倒木で破損していた。仮手当てする
７日　広島市安佐動物公園飼育係になった田口勇輝さん来所
８日　日本テレビより２月放映の賞金 1.4 万円寄附あり
９日　180×60×60㌢水槽の可動水槽台作成
１１日　マイクロチップのハンディ・リーダー購入（コベルコ助成 13 万円）
１２日　ハンザキの健康診断受託の株式会社・長大の３名来所
１３日　・関西電力４名視察に来所
　　・アンコ淵観察用カメラ不調となる
１４日　西日本エコテックからカメラの調整に
１５日　・山は雪化粧となる
　　・兵庫県養父土木事務所へ報告書提出に
１６日　特別整備資金によってユンボ 80 万円で購入
１７日　・NPO 事務局会議６名
　　・クリ・ナシ・モモ・リンゴ各２本植樹する
１９日　東京・朝来会の鈴木英之幹事来所
２０日　新しくできたパンフレットを JR 生野駅他市内８か所に配布
２１日　三重県・赤目保勝会山口氏など９名来所
２２日　・ハンザキの月例健康診断（長大の橋本氏、地域生態系の村上氏他で初実施）
　　・城崎水族館の高田氏来所
　　・アクア東条の岡崎氏来所
　　・関西電力奥多々良木発電所・所長他来所、黒川ダム湖からのハンザキ救出作戦実施について検討
２３日　県立大学の三宅先生と学生 10 名来所
２５日　但陽信用金庫・桑田理事長視察に
２６日　朝、霜あり
２８日　構内の駐車場整備、バラスを敷く（8.8 万円）
２９日　・平成 17 年の開所以来の来訪者数１万人目のセレモニー
　　・河川工事現場からイシガメ 37 個体搬入
３０日　・久し振りのモンドリ調査、ムギツクとカワヨシノボリが０個体であった
　　・NPO の会計担当、黒田氏 1.5 か月ぶりに退院

（本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。）